

ずんどこ通信 2024

春号

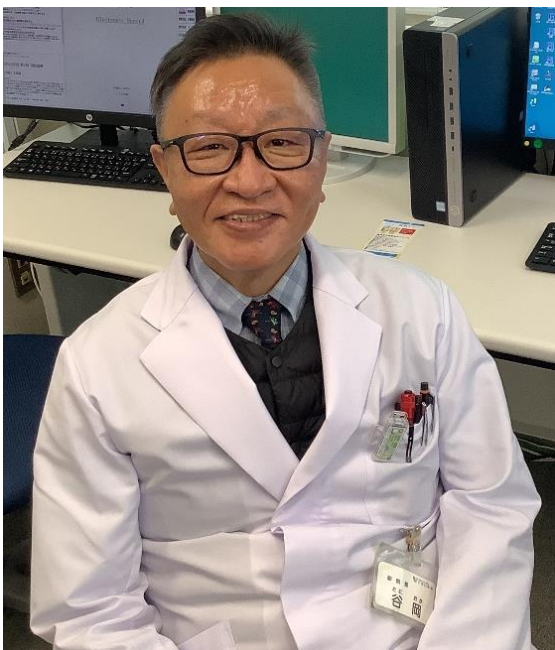


医療法人社団 関田会
ときわ病院

所在地

〒673-0541 三木市志染町広野5丁目271番地
TEL 0794-85-2304(代) FAX 0794-85-3868
URL: <http://www.tokiwa-hospital.or.jp>

院長着任 谷岡 康喜



この度、医療法人社団関田会 ときわ病院の院長に就任しました 谷岡 康喜 (タニオカ ヤスキ)です。私は昭和 62 年に神戸大学医学部を卒業し、関連病院での研修を経て、神戸大学大学院、附属病院において、消化器外科(特に胆、膵)、移植外科(膵・膵島移植)の臨床、研究に従事してきました。その後市中病院において、一般外科のみならず、広く高齢者医療に従事し、現在に至っております。

ときわ病院は、現在、188 床を有し、創立者の関田幹雄先生を始めとする先人達の尽力により順調に発展し、地域の皆様に信頼され、頼りになる病院であると認識されていると感じております。

我が国においては、少子高齢化が進み、当院を含め多くの医療機関では、高齢者医療への対応力の強化が求められております。この際に、患者さん本人の医療の問題は言うに及ばず、ご家族の負担軽減という観点も忘れてはならない重要な問題であると感じております。幸い、ときわ病院には、医療を支える看護、介護、リハビリ、更には地域連携室といった、各部門が充実し、相当な実力を有していると感じております。

私は、これら各部門の連帯をより一層強固なものとし、チーム医療を推進して、多くの患者さんとその御家族に、“ときわ病院で良かった”と言っていただけるよう、精一杯努力したいと思います。これからもときわ病院をよろしく願います。



令和6年能登半島地震:日本災害歯科支援チーム(JDAT)兵庫に参加して



ときわ病院 歯科口腔外科 足立了平/檜山弥侑

令和6年元旦に能登半島で発生した地震は、死者241人、関連死15人、行方不明19人という当初の予想を遙かに超えた甚大な災害になりました。発災直後から災害派遣医療チーム(DMAT)や災害時健康危機管理支援チーム(DHEAT)、日本医師会の日本災害医療支援チーム(JMAT)などが被災地に入り健康被害に対応しています。歯科においても、1月13日に石川県歯科医師会から日本歯科医師会に向けて支援要請があり、日本災害歯科支援チーム(JDAT)が組織され18日より活動を開始しました。ときわ病院からはJDAT兵庫の第1陣として足立、檜山が5日間の日程で歯科保健支援活動に参加しました。

ときわ病院では、東日本大震災(2011)、熊本地震(2016)においても歯科医師や看護師による支援チームを被災地に送ってきました。災害時になぜ歯科保健支援が必要なのでしょう。それは災害関連死の予防には口腔ケアなどの歯科保健支援が有効だからです。災害関連死で最も多い疾患は約1/3を占める肺炎です。その多くは口腔内細菌の気管への誤嚥によって起こる誤嚥性肺炎です。大規模災害時において、肺炎による高齢者の死亡を減らすためには口腔ケアが欠かせません。何よりも、「口腔ケアは命を守るケア」であることを被災者自身に理解してもらうことが最大の健康被害対策なのです。(足立記)



JDATは2022年に創設され、今回の地震が初めての派遣になります。私たちはJDAT兵庫の記念すべき第一陣として、1月26日から28日まで輪島市街地および近郊において支援活動を行いました。避難所を回り歯科関連支援物資の提供や災害関連死の原因疾患である肺炎予防のための口腔ケアの重要性について指導および義歯の紛失などに例えられる口腔内に問題を抱えている避難者のスクリーニングなどを行いました。道路が寸断されており被災地域に入るまでに相当な時間を要する

うえ通行できない路地も多く、避難所への支援も困難なものがありました。3日間で計8か所の避難所を訪問しました。被災者の方々に話を伺うと、避難所によって支援物資の配給に差があること、支援物資は届いてはいるもののその存在を知らない避難者が多いこと、配布された口腔ケア用品の使用方法がわからなかったり誤嚥性肺炎に口腔ケアが有効であることを知らなかったりする被災者が多いことなど多くの課題が山積みでした。研修医として今回の災害支援に参加させていただいたことは非常に貴重な経験であり、上記のような課題を目の当たりにし災害医療に対する認識や意識も大きく変化したように思います。また、自身も被災されながら地域のために休みなく尽力されている地元の先生方の献身的な姿を拝見し、尊敬の念を抱きました。一步避難所を出れば、崩壊した建物や地割れしたままの道路など今回の地震の大きさを痛いほど感じさせられます。支援期間中にも何度かの余震がありました。こうした環境下での被災者の方々の精神的・身体的疲労は想像をはるかに上回るものであり、被災地における医療支援は必要不可欠なものでありながら、現地の方々にとっては微々たる支援であることを痛感させられる5日間となりました。(檜山記)

